日本基督教団の戦争責任告白から50年　アジアからその意味を振り返る

日韓キリスト教関係史における戦争責任告白の意義

明治学院大学教授　同大学キリスト教研究所所長　徐（そ）正敏（じょんみん）

1967年3月26日の復活主日、日本基督教団総会議長鈴木正久の名義で発表された「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」（以下、「戦責告白」）から、今年で50周年を迎える。この告白文は日本のプロテスタント・キリスト教史の中で最も意味深い文書であり、その発表は日本のキリスト教における歴史的転換を起こした事件でもある。筆者の観点から、半世紀を迎えたこの時点で、戦責告白の歴史的意義をもう一度考えてみたい。特に、これを日韓キリスト教関係史の側面から、それを土台とする意味も付け加えつつ再考したい。

日韓キリスト教の関係史を振り返る

1880年代初め、韓国の高位官僚であった李樹廷（イ・スジョン）が留学のため来日した。彼は日本の近代文物、特に農学を勉強する目的で来日したのである。しかし彼は結局、津田仙を含む日本の初期プロテスタント・キリスト教の指導者たちと出会い、韓国人としては最初のキリスト教改宗者の中の一人になった。彼は日本在留期に聖書をハングル訳し、アメリカの教会に向けて韓国に宣教師を派遣してくれるよう要請した。その願いは実を結び、韓国キリスト教受容史の一端を担う役割を果たした。

李樹廷の韓国プロテスタント・キリスト教受容者としての役割を可能にしたのは、当時の日本のキリスト教指導者たちによる全面的な後援であった。このような歴史を象徴する証拠となるのが、1883年5月に東京で開催された第3回日本キリスト教徒大親睦会の記念写真である。この懇親会に招待された李樹廷は、ハングルで初めて公衆の面前において祈祷を行い、自らの信仰告白文も公表した。それは『六合雑誌』や『七一雑報』に記録されている。その頃の李樹廷との出会いを内村鑑三は次のように記している。

> その上、こんなこともあった。出席者の中に一人の韓国人がいたが、彼はこの隠遁的の国民を代表する名門の出で、これより一週間前に洗礼を受け、自国風の服装に身をととのえ、気品にあふれて、われわれの仲間に加わった。彼もまた自国語で祈った。われわれにはその終わりのアーメン以外はわからなかったが、それは力強いものであった。彼が出席していること、彼の言葉をわれわれが理解できないことが、その場の光景をいっそうペンテコステらしくしたのである。これを完全なペンテコステにするためには、ただ現実の炎の舌だけが必要であったが、われわれはそれを自分たちの想像力で補った。われわれの上に、何か、奇跡的な、驚くべき事が起こりつつあることを、一同は感得した。われわれは、太陽がなお頭上に輝きつづけているかをさえも怪しんだ。（内村鑑三、『内村鑑三信仰著作全集2』、教文館、1962、63―64、吳允台、『朝鮮基督教史Ⅳ　改新教伝来史　先駆者李樹廷編』、惠宣出版社、1983、62―63）

このとき、日韓プロテスタント・キリスト教の歴史は肯定的な関係から出発したと言える。しかし、徐々に日韓の近代史は帝国主義国家と植民地という不幸な関係へと進み、両国のキリスト教も対立と葛藤の関係を形成していった。

日本の近代国家形成過程において、国家及び社会から排斥される対象であった日本のキリスト教は、国家に対する全面的な協力と積極的な参加を通して、その最小限の信頼を獲得するために努力する姿勢を見せた。その中で、日本の韓国侵略に対しても理論的、実践的に寄与し貢献した。一方、国権喪失期に受け入れられた韓国のプロテスタント・キリスト教は、民族の独立主権を取り戻す社会運動を主導し、いわゆる「民族教会」の道を歩んで行くことになる。日本の「国家協力的キリスト教」と韓国の「民族運動的キリスト教」は、両国の運命が相反した状況に置かれたかのように、対立した関係史を生み出していった。

この時期の日韓プロテスタント・キリスト教関係史の対立するテーマは、第一に、いわゆる日本のキリスト教の「朝鮮伝道論」によるキリスト教の植民地統治への助力プログラム、第二に、韓国のキリスト教の「3・1独立運動」に代表される独立運動参加をめぐる葛藤、第三に、神社参拝と天皇崇拝を取り囲んだ日韓両キリスト教の立場の違いと葛藤などに集約することができる。

歴史的転換としての戦争責任告白

徹底的に国家に協力し、特に日韓の歴史的関係の中で国家的目標に貢献する立場をとった日本のキリスト教は、敗戦後、衝撃に襲われた。この時、日本基督教団を中心に一定期間、沈黙の歴史が流れた。もちろん、1946年に日本基督教団の「新日本建設キリスト教宣言」のような文書は発表されたが、内容と論理において、既存の日本のキリスト教からの全体的、あるいは画期的な変化を読み取ることは難しい。1967年3月の「戦責告白」が発表されるまで、日本のキリスト教は歴史的な転換を成すための準備期間として「沈黙期」を送っていた。

そしてついに、50年前の1967年の復活主日、日本の代表的なキリスト教団体として日本基督教団が歴史的な「戦責告白」を発表した。

> わたくしどもは、教団成立とそれにつづく戦時下に、教団の名において犯したあやまちを、今一度改めて自覚し、主のあわれみと隣人のゆるしを請い求めるものであります。わが国の政府は、そのころ戦争遂行の必要から、諸宗教団体に統合と戦争への協力を、国策として要請いたしました。（中略）まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を

懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。（日本基督教団「戦責告白」）

この事は、そのまま日本におけるキリスト教全体の歴史的立場の転換を導く起爆剤になった。筆者はこの告白文の具体的な内容を分析するよりは、大きなフレームの中でこの告白が持つ歴史的意味を考えてみたい。

第一に、１９６７年以前の日本のキリスト教は、国家の目標に協力し加担していた。しかし、この時を基点に国家の政策に対して預言者的に批判する姿勢をとりはじめた。第二に、以前は社会の主流に編入しようと努力し、多数の信頼を獲得することを目標にしてきたが、社会の少数者、すなわちマイノリティの立場を代弁する自らのアイデンティティを確保する方向に転換した。第三に、アジアの支配者として存在する日本国家を支持してきたが、アジアの民衆に対する加害者としての反省と悔い改めを告白する姿勢をみせるようになった。第四に、植民地朝鮮と韓国のキリスト教を批判して葛藤関係を維持してきたのが、韓国に対する歴史的責任を論じ、韓国のキリスト教と積極的な協力関係を模索しはじめたのである。

終戦から20年余を経過し、わたくしどもの愛する祖国は、今日多くの問題をはらむ世界の中にあって、ふたたび憂慮すべき方向にむかっていることを恐れます。この時点においてわたくしどもは、教団がふたたびそのあやまちをくり返すことなく、日本と世界に負っている使命を正しく果たすことができるように、主の助けと導きを祈り求めつつ、明日にむかっての決意を表明するものであります。（日本基督教団「戦争責任告白」）

これは、根本的な進路変更を決断する告白文の最後の部分である。そして以上の日本のキリスト教における立場の転換は、戦責告白の発表と謝罪にとどまるものではなかったのである。

実践的な変化と連帯

日本基督教団は１９６７年の戦責告白以後、具体的な宣教プログラムに取り組み実践を試みた。それは概して日本社会の中に存在するマイノリティに対する理解と、彼らと共に生きる努力であった。

第一に、戦後日本社会の代表的マイノリティであった「在日韓国・朝鮮人」に対する関心を表した。彼らのほとんどは、植民地朝鮮から強制的に移住させられた歴史的な犠牲者であった。それにもかかわらず、戦後の日本社会で徹底的に排除され差別を受けてきた。これに対する差別撤廃、人権保護などに対する積極的な関心を表し、実践を行ったのである。これはそれ自体、韓国に対する歴史的責任をより具体的に実践する事でもあった。第二に、沖縄問題に対する関心である。沖縄は、日本の戦争遂行の過程で最大の被害を被った地域として大変な歴史的な傷を負っている。アメリカの軍政と米軍基地問題、日本政府からの差別などにより、戦後も持続的に困難な状況が続く地域である。この問題に対する日本基督教団を中心にした積極的な関心と介入は、戦責告白の具体的な

実践の一つであった。第三に、伝統的な日本社会の被差別階層である「部落」、「アイヌ」に対する関心である。この問題は、戦後新しく出てきた問題ではない。しかし、日本のキリスト教が社会的弱者に対する関心と愛を表してから、彼らに対する問題意識も共に表れた。障がい者、都市貧民、農民、労働者、外国人、女性、性的少数者、いじめやひきこもりのこどもなど、社会的弱者に対する持続的な関心と努力は言うまでもない。

以上の実践的な変化、つまり日本基督教団を中心に１９６７年以後に展開された具体的な進路変更こそ、戦責告白の核心的・歴史的な意味ではないかと考える。筆者は、大学の講義で世界のキリスト教史を概観する時、常にキリスト教の存在様式を「最も美しい姿」と「最も醜い姿」に区別する要素があると説明する。まず前者は、歴史の中で低く、卑しく、少数である弱小者とともにあるキリスト教の美しさである。だが反対にあるのは、強く、富裕で、多数である主流に陥って自らも力を誇示しようとするキリスト教の醜さなのである。

日韓キリスト教関係の模範と現在

日本基督教団の戦責告白の背景には、日韓キリスト教関係の変化と肯定的な関係回復の可能性が融合している。特に、植民地解放以後の韓国のキリスト教は、南北分断と戦争の混乱を経験し、歴史的転換のために一定の時間を要した。

これに伴い極端に分裂した韓国のキリスト教内部には、日韓キリスト教関係の新しい接点を模索する余裕がなかったと言える。しかし、韓国のキリスト教の中でも進歩的なグループが軍事独裁政権と対決し「民主化運動」を行っていた最中、この民主化運動や統一運動に対して日本のキリスト者たちが最善の協力者として名乗りをあげたのである。そしてこの過程で、一部の日韓キリスト教は戦後日韓関係史で最も模範的なモデルを新たにつくっていった。

１９７０～80年代にかけて東京は、日韓間、またアジアを基盤とするキリスト教が正義ある協力関係を作り出す中心地になった。これは近代以後、アジアにおいて東京が正義ある事業を試みた最初の事件としても語られている。

ある人は、１９６７年に発表された日本基督教団の戦責告白が教団の総意を込めた文書ではなく、教団議長の個人名義で発表された点を批判する。そのため告白文に込められた歴史的意義を過小評価する。しかし、筆者はむしろその告白文に対する激しい賛否討論、葛藤が存在したことに注目し、反対の評価を下したい。すなわち、人々が看過する告白文の別の側面を理解してみたい。筆者は告白文がいわゆる「満場一致」に近い教団総意を土台にした結果のものであったなら、むしろそれこそ真の歴史の過程ではないのではないかと考える。反対と葛藤、深い苦悩と決断があってこそ、それを通して築かれた歴史により真実が現われるのではないだろうか。１９６７年以後の歴史的転換と経過、実践がより重要な意味を持つのではないだろうか。

ただし一つ、戦責告白当時の日本基督教団と日本のキリスト教界の「初心」が、現在どれほど再考され、どれほど維持されているかを問いたい。50周年を迎える今、歴史的な立場を新しく確立してゆく再転換の機会になるよう願う。